転生後の代役王子

さん太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生後の代役王子

【Ｎコード】
Ｎ２０７８Ｌ

【作者名】
さん太

【あらすじ】
人生の最後を感じ目を閉じる。再び起きることのない眠りへとついた伊織（女）だったが、再び目を覚ましたら今までの自分じゃない。
異世界だし、殿下ってよばれるし、男になってるし。どうやら転生後の自分らしい。
ともあれ、元の殿下の魂が戻ってくるまで代役王子頑張ります！
王宮で仲間たちと過ごすほのぼのストーリー。後半シリアスあり。
中編予定。

※ＴＳ異世界転生ですが憑依ぽいかもしれません。最強要素やハーレム要素はありません。

1．伊織　ー転生？新しい自分ー

柴崎伊織２３歳。
まだまだ若いと言いたいのだが、残念ながら今生は今日までだろうな。そう人生の終わりを感じた。
理由なんて簡単だ。たまたまかかった病気が不治の病だった。それだけである。幸いだったのはそれほど長く苦しまずにすんだ。
２２で病気が発覚し、そのまま通院と入院を繰り返した。
友達も彼氏も最初は足げに通ってくれたが、どんどん縁遠くなり、彼氏から別れを切り出されるのもさほど時間はかからなかった。ドラマのようにはいかないんだな。と思ったものだ。
病院で窓の外を見ながら、もう少し生きたかったな。と思いながら目を閉じた。
苦しいのはもういやだった。もう次に目を空ける事はないだろうな。だけども、それでもいい。終わりにしよう・・・。
苦しみからも。孤独からも。

痛い痛い痛い痛い。苦しいし気持ち悪い。
頭がガンガンするし、体のあちこちがきしみをあげている。気持ち悪くて思考も鈍る。
周りで何か言っている音が聞こえるが、理解する余裕すらなかった。やっと病気の体から開放されると思ったのに、まだ私の魂はしぶとく体にくっついていたのか？
薬の副作用と発作と手術の繰り返しをまた繰り返さねばならないのか？もう嫌だ嫌だ。苦しいのはもう嫌だ。
もう終わったと思ったのに。

「ＸＸＸＸＸＸ！？」

医者だろう？再び自分に声をかけているらしい音が聞こえる。
医者ならお願い。早く麻酔をうってください。家族の誰かなら早く担当医を。
私は薄目をあける。
目を開けるのも久しぶりなのか、やけに光がまぶしく感じられ少し動揺してしまった。
視界にもやがかかっている。
上手く見えない。
だが、白い服を着た人間らしき存在をみつけ。なんだ先生いるんだ。と安心して、再び意識を失った。

再び覚醒したとき、体は痛むものの不思議なぐらい体が軽かった。
なんとか動けそうだし、物も食べれそうなぐらいだ。
珍しいと思うのも無理もない話で、首を傾げたくなる。
ここ１ヶ月でここまで安定した日は少なかった。常にまとわり付く気だるさと嘔吐感や動く毎に伴う痛みでまともな生活は不可能だった。
点滴と現代医術によって「生かされている」そんな状態だったのだから。
珍しい事もあるものだと。私は目を開けた。
・・・あれ？

視界に入ったのは病室の単調な色彩と何もない部屋ではなく・・・。
華美な天井。そしてベッド。カーペットなどの家具。
どう考えても病室とはかけ離れたものだった。
部屋も自室より格段に広い。
というか、知らない場所だし？

ここ、何処？

混乱しながらも体を起こす。
思った以上に体が動く。ベッド上だが軽く体を起こす事ができた。

なんていうかヨーロッパ風な・・・。昔行った異人館を思い出す。
ドイツの白亜の城や、フランスの宮殿とかのが近いのだろうが、残念ながら海外旅行を経験していなかったので手近な神戸の風景を思い出した。
だが自分は神戸とは程遠く、そして横浜とも離れていた。近くにこんな場所に覚えはない。
大体病人運んでも意味なんてないだろう。コレは夢か？

「殿下？」

軽く身じろいだ私の気配に気がついたのか、白衣の男性がやってきた。
うわー。美形だ。
思わず見入ってしまうその外見。
こういうのを銀糸の御髪に、深い紫の瞳。そのパーツを持ってることを裏切らない整った容姿！
これぞ神の落とし子といっても過言じゃないかもしれない。
ハリウッドスターだって真っ青だ。

「よかった。目が覚められて。」

その美形は私の方へ水差しを手にやってくる。

「水飲めそうですか？」

彼はサイドテーブルにおかれたコップを手に乗り優雅な手つきでなみなみと注いでいった。そしてベッド脇に座り、コップを私へと向けた。

水を目の前にして、私は今更ながら喉の渇きを実感する。

「有難う・・・ございます・・・。」

「え？」

お礼をいい、コップを受取る。

水を一口飲むと、冷たさが喉にしみとてもおいしい。

「あの。殿下。私のことが分かりますか？」

「は？」

美形が私をみて怪訝な顔をしている。

わかるもなにも、こんな美形一度あったら忘れない。

だが、

「カリウス？」

なぜか分かってしまった。

おや。なんでだ。

というか、殿下ってなに？
思わず答えてしまったが、殿下って仇名をうけたことすらない。
「お礼を言われるなんて、吃驚してしまいましたよ。」
カリウス本人は名前をよばれたことで安堵しているらしく、ほっとした表情をみせた。
あれ？
違和感・・・。
今更すぎるものもあるが、
自分の声。
腕。
視線の位置。
おかしいものは居る場所だけじゃなかった。
長年親しんだ声じゃなく、幾分か低いものであり
腕はたくましく、
視線は高くなっている。
私は手のひらを見つめた。
記憶よりでかくごつい。
手のひらを見つめつつ、さらに続ける。
「カリウス・・・？殿下って・・・？誰の事っていうか、私のこと

？あれ？」

記憶が混濁する。
私の記憶には、「殿下」と呼ばれたことがない。だが、俺の記憶ではいつもそう呼ばれていた。
『私』と『俺』の二つの記憶が自分の中に存在している。
ひとつは『私』としての伊織としての人生の記憶と感情。
だがもうひとつ『俺』の記憶がある。殿下と呼ばれた日々。エディリオ・ハノーヴァー。ネーデルラト王国の第一継承権をもつ皇太子・・・。
感情をすっぽりぬいた記憶のかけらが自分の中に存在しているのだ。

「あの？殿下？大丈夫ですか？」
「大丈夫じゃないというか。少し混乱してる・・・。」

この部屋。この場所。
これはエディリオの人生の一幕。
伊織の人生の終幕らしきはあるが、エディリオでの人生の終幕は思い出せないし、現在の状況を考えるならば、私はエディリオではないか。
鏡をみたら、エディリオの顔だろう。
手や声は彼のものだ。記憶と一致する。カリウスが自分を殿下というのもそうだ。

「殿下。まだ顔色がすぐれません。横になってください。」

カリウスは私からグラスを受取り、体を横たえようとする。
私は逆らわずそれに任せる。

「自分はエディリオなんだよね？きっと。」

「何を当然のことを？」

やっぱりそうか。
伊織の魂が、エディリオに憑依したのか。
伊織という前世の記憶が、表に出たのか。どちらなんだろう？
憑依ならば今すぐにでも離れたい。でも、幽霊の記憶もなければ知識もない。どうすればいいのかもわからない。
では来世なのだろうか・・・。

どちらにせよ、私は今までのエディリオじゃない。偽ったところですぐばれる。
目の前の男は、カリウスは信用できる人物だ。少なくともエディリオにとっては。だが伊織の魂を色強くもってしまっている私にとって信用ができるか？それは分からない。

「カリウス・・・。私は今までの俺じゃない。」

私はカリウスにすべて打ち明けた。

カリウスは真面目にすべて聞いていた。
自分は伊織で、日本という国で育ち死んだ事。気がついたらここにいたこと。だけど、エディリオの記憶もあること。
だけども、エディリオの記憶は感情がともわない映画のような事実だけが残っている事。
それゆえに私は憑依しただけの幽霊かもしれないと。

下手したら、エディリオ殿下の意識を封じ込めてる悪霊の類かもしれない。考えてみればすぐに払われたり害されたりしてもおかしく

ない暴露だったと思う。
だけども、これはエディリオの体だからそれでもいいとおもったのだ。

「話はわかりました。」

私が一通りしゃべり終わった後、彼はそう切り出した。

「憑依といいましたが、それよりも伊織様という前世の記憶が表面化したのだと私は考えます。この世界での死後の考えにも、転生という概念はあります。ですが、伊織様の世界とは少し違いますね。」

「世界と違う？」

微妙なニュアンス。

「ええ。この世界には日本という国はありません。殿下の記憶があるならば思い出せるでしょう。」

いわれてハッとした。地球にネーデルハトという国を知らない。だが２００近くある国を全部はしらない。そんな小国があってもおかしくないと思っていたのだが、日本を知らないわけがない。あんな小国でも認知度はかなりのものだ。

それにネーデルハトは小国ではない。
他に付随して地図も思い出す。明らかに世界が違う。

「異世界・・・。」

カリウスがうなづく。

「そうです。話を聞いた限りではそうでしょう。
そして、私たちは死後に異世界へ旅立つといわれています。逆に異世界からたどり着いた魂が赤子の魂として宿るとも。魂はいろんな世界を旅しているというのが通説ですね。その世界に魂がとどまるならば、人口は変化しないですから。」

虫とかに魚に生まれ変わるかもしれないよ？といおうとしたがやめた。
この世界では人は人であって、虫は虫に生まれるという転生理論だったと思い出したからである。

「だから魂は一緒なのです。表面に前世の記憶が出てしまっただけでしょう。」
「とりあえず原因は分からないけど、早く戻れるよう努力するから。だからそれまでの間いやかもしれないけど協力して・・・くれますか。」

考えてみれば何処をどうやって努力すればいいのか、皆目つかないわけなのだが、私も必死だった。憑依じゃなくて本当に前世だとしても、この体の本来の持ち主に早く返さねばならない。
だけどすぐに戻れない限り協力をうけないと、もしもの時に困る。

「そこまで必死にならなくともご協力いたします。幸い、殿下の記憶も思い出せるようですし、今までどおりのスケジュールで問題はありませんね。」
「え？問題あるんじゃ？」

どう考えても問題だらけだと思うのだが。
主が”こんなん”だよ？

「もしも記憶喪失というならば、今後の実務に支障があり困ります。ですがそうではないのでしょう？少なくとも記憶はある。そうおっしゃりましたよね。」
「うん。感情が伴わない記憶は・・・。記憶の連鎖で忘れてる事もきっかけがあれば思い出せると思う。」
「それではなにも問題ないじゃないですか。エディリオ殿下としてお過ごしくださいませ。」
「えええええ？何言ってるの？無理だよ。分かりきってるよ。そんなこと。」
「何処が無理か分かりかねます。お姿はホクロの１つまで変わらず、記憶までお持ちになる。それで不可能なわけがないでしょう。後は心持ひとつです。
そうですね。まずはその言葉遣いからお直しくださいませ。それじゃオカマのようで支障がありますよ。」

口の端をあげにこりと笑みを浮かべつつもカリウスの目に笑いはない。そんな彼の背中に何故か黒い羽が見えた気がした。きっとそれは間違いじゃない。
こ、この人恐ろしい・・・。

そして私の殿下生活が始まるのであった。

2．ナーシル　―剣と犬？―

現在の私はエディリオ・ハノーヴァーという。

欧州童話のように金髪碧眼という王子様の絶対条件をみにつけていたりする。髪は短く日本人の私の感覚で男のロンゲはあまり好きじゃないから良かったと思ってみたり。

すらりとして引き締まった体。加えて整った容姿はどこの王子様だ？と首をかしげてもおかしくないわけだが、何気に本物の王子様だったりする。

地球とは違う異世界の国。ネーデルラト王国の第一継承権をもつ皇太子。今は殿下だが、父である国王が引退したら陛下として即位しなければならない重要な立場をもっている。

現在２３歳らしくまだ好きにさせてもらっているが、いずれは妻を娶り国王の右腕として華々しく公の世界へとデビューをしなければならない。

――――――それだけ考えてとても憂鬱になった。

いや無理だし。

なんせ記憶のかけらは持っていようが、感情が伴わないのが悪いのか記憶の連鎖は簡単にはつながらない。加えて、幼少から培った生活と環境が性格とか覚悟を大きく変えていたりする。

日本で甘々な生活を送ってきた私がいきなり重臣とか、殿下とか挙句の果てに国王とか無理すぎる。貴族間の駆け引きなんてやりたくない。

まあそもそも、そこまで自分も長く居座るつもりがない。早く本物のエディリオの人格が戻ってきて欲しいと思う。そりゃね、自分が消えたら何処に行くかとか怖いんだけど、それが正しい在り方ってやつですし。
大体回りの人に悪いと思うのだが、おかしな事におもいきり容認され、受け入れられている。

「リオ殿下。筆が止まっております。」
「あ、ごめん。」
カリウスに指摘され、手に持った書面にサインを施す。
現在は執務中。
過去もずっとやっていた内容だから、普通にこなす事ができる。
仕事なんて所詮作業であって、毎日の積み重ねだから書面を読んだだけで、回答はこれだろうというものがわかる。エディリオは博識だったのだ。
知識があって本当に助かった。

ちなみにサインも書面の字も、最初は気がつかなかったのだが話している言葉も日本語ではない。この国のものだ。
普通に使えて気がつくのが遅れた。頭の中で翻訳はされていない。
その言葉が母国語のように使えて理解できるだけだ。
まあ、なるべく男らしい口調はこころがけてはいる。はー、めんどくさい。

「そのリオ殿下ってさ、前から使っていたっけ？」
この部屋には業務机が2つある。重量感ある大きなデスクは自分のもの。もうひとつは簡易テーブルで、僕がいつでも質問が出来るようカリウス用に最近運ばれたものである。カリウスはその簡易テー

ブルで書類に目を通している。小さなテーブルはところ狭しと書類の山が出来上がっている。
僕はそのテーブルで作業をしている彼に言葉だけで問いかける。目線は書面をおったままだ。

「いえ。1週間前からですよ。」
「僕がきてから？」

カリウスも手元の作業は止めず、顔だけ軽くこちらを向いて答える。サラッと長い髪が揺れる。
そしれにしても・・・。もう一週間も経つんだな。時の流れるのは早いものだ。実務ができるとは思わなかったが、問題なくこなせて、いまやそれが日常になっている。

「はい。
伊織様の記憶をもつ殿下のことはリオ殿下とお呼びして分けているのです。」
「なんで？」
「分かりやすいからですよ。もしエディリオ殿下でしたら、リオ殿下と略されて呼ばれたらなんらかの反応を示すと思いますので。特に嫌がりもせず了承している間は貴方であるだろうという目安です。」
「まあ別に呼び名なんて何でもいいけど。」

リオ殿下だろーと、エディリオ殿下だろーと、ただの殿下だろうと呼ばれていることが分かれば応答する事が可能だ。
でもなんか、リオと伊織はちょっと似てて過去の自分を信じてもらってるようで・・・。

「悪くないね。」

わずかに微笑みを浮かべた。

「気に入っていただいて何よりです。」

そんな僕につられたのか、カリウスも微笑む。悪魔の微笑みじゃなくふわっとした微笑。

時々、本当に稀(まれ)にだがこの悪魔も腹黒さのない微笑みを浮かべる。

これがあるから彼が本当は優しい人だと実感する。

もっと多様すればいいのに。もったいない。

どたどたどた。

そんな足音が近づいてきて、バタンとドアが大きく開かれた。

「リオ殿下――！いるかー？」

元気よく姿を現したのは、見知った顔でナーシルだった。エディリオの片手的存在で、近衛隊長もやっている。幼少より見知っており、信頼できる存在だ。だからこそ、彼も僕の現状をうちあけられており、フォローに入ってくれる。

短い赤毛で、良く日に焼け、剣士たるにふさわしくとても鍛えてある筋肉が目につく。

今日の姿はいつもより軽装で、体の線が余計に分かりやすい。体育会系なかっこよさをしっかりとそなえている。精悍ながらも人好きする顔に見えるのは、信頼されているからだろうか？逆に信用している欲目なのかもしれない。

声も大きくはきはきと自分の意見を述べ、時には冗談を飛ばし、場を盛り上げ明るくする。面倒見もよく部下からも好かれているらしい。

「いるよ。どうしたんだ？やけに楽しそうだけど。」
「お。いるね。今暇か？」
「ふつーに執務中さ。」
「そんな紙切れ後でいいから、俺と一緒に体動かしにいかねーか？
今日は非番なんだ。」
「は？」

な、なんというジャイアリズム。
思わず返答に困ってしまう。僕が僕で居る限り言葉遣いを改める必要性はないと思うが、一応主君は僕じゃないのだろうか？

「今日のノルマはさほど多くありませんから、かまいません。」

さらにカリウスからもＯＫが出る。

「いやでも・・・。」
「むしろいってきてください。」
「なんでっ」
「ほら、カリウスからも許可でたし、いくぜ。」

ずるずるとナーシルにひきづられていく、僕。
君ら主君に対する扱い酷くないか？
逆に主君としての役目を果たしているかと言われたら、果たしていないわけだけどもさ。僕の意見だってきいてほしいのさー。

「いやー、嬉しいね。」

ナーシルはウキウキ、ルンルンと（男にルンルンという評価もどう

かとおもうのだが・・・）中庭の広場で肩を回している。
準備体操的なものだろう。
何がそんなにうれしいんだか。

「おい。リオ殿下。そんなに辛気くせー顔をしてないで、早く諦めろ。なっ。いつまでも屋敷の中にいたら体なまっちまうだろ？せっかく鍛えてある体が泣くぜ。」
「主君を敬ってほしいなーなんて思ってみたわけなんだけど・・・。」
「リオ殿下を？無理無理。」

少々大げさともいえるぐらい、手を振り否定する。顔には「何の冗談？はっはっは」と描かれているようだ。
あ、はい・・・。そうですか。
あえなく撃沈。なんなんだ。僕が悪いのかー。僕が悪いのかー。
もうこれは諦めるしかないと、上着を脱いだ。そして近くの木の枝に引っ掛ける。
確かに青空が目にまぶしいほどの晴天である。外で体を動かしてもいいのかもしれない。僕はインドア派で運動とは無縁ではあったが、この体はしっかりと鍛えてある。
たまには体を動かすのもいいのかもしれない。

「ほいよ。」

ナーシルが投げてきたものを、条件反射でうけとる。
手に持ったものに目をやると、刃がつぶされた両刃の剣。

「ちょ。投げるようなものじゃないだろー。」
「さ。やるぜ。」

ウキウキが収まらない彼。
もはや餌を前にした犬っころ。何をいっても無駄だろう。

剣の柄を握る。
ああ。体が覚えてるってこういうコトを言うんだな。
手触りがしっくりとくる。
悪くない。

僕の準備が整ったのを確認し、ナーシルが剣を構え打ち込んでくる。
1打、2打と振り下ろされる剣の切っ先が見える。

カキンッ　カキンッ

ぶつかり合うたびに、硬い金属の音が響く。3打、4打と繰り返され、5打目にお互いの剣を組み合わせ、力の押し合いになる。動きがとまる。ナーシルの姿が目前に来る。
ニヤリッと彼は笑みをうかべ、後ろに下がった。
それにあわせ僕も下がる。

「しっかりと殿下の腕だな。強い。」

剣を構えたままナーシルは言う。
銃刀法違反のある日本で剣の打ち合いなんぞをしたことがないから、基準なんて分からない。だがしかし、剣を軽く扱え打ち合える。
簡単に息も上がらない気がする。体が軽い。

「そのようだ。」

今度は自分の方から、ナーシルへと打ちに行った。

何度も剣をあわせ時間が経つのも忘れた。
心地よい汗が額をつたる。
お互いに息も上がってきた頃、ナーシルは剣を地面に突き立て大きく背伸びをした。
これは終了の合図だろうと、自分の剣を置き、ズボンが汚れるとは思いつつも地べたに座り込む。
疲れたのだ。

「やはり、俺の相手が出来るのは殿下だけだな。」
「自分の部下でもいいだろ？」
「相手になんねーよ。手加減しながらやる勝負なんて面白くねえ。あのな、自覚がないみたいだから言ってやる。俺はこの国でも5指に入るぐらいの剣豪だと自負している。実際のところは図りようがねえけどな。
そして、そんな俺と同格の剣の腕をもっているのは、俺の周りじゃ殿下だけだ。」
「は？自分ってそんなにすげーの？」
「すごいはずなんだが・・・。リオ殿下じゃすごさ感じねーな。」

ナーシルは笑い出した。失礼な話である。
仕方ないだろ？基準がわかんないし、気がついたら出来る的な付属オプションだ。

「拗ねるな。」

座り込む僕の頭をなでくりまわす。
記憶の連鎖が出てこないし、少なくとも今あるエディリオの記憶にはこんな風に扱われた事はない。

「拗ねてないってばー！」
ナーシルの手を払って反撃するも、ナーシルは笑いが収まらないようで笑い続けていた。
再び僕の頭をわしゃわしゃと乱雑にかき乱しながら。

後日談になるのだろうか・・・。
カリウスから一本の剣を渡された。見覚えのある精錬された刃物。
エディリオが帯刀していたものだ。
「殿下の腕が衰えていないようで安心いたしました。」
何かあったときに自分の身を守るようにと渡された。「リオ殿下が剣を扱えるか分からなかったので預かっていました。」と続けて言う。
何故行ってこいといったのかが分かったような気がする。試したんだろう。もしかするとナーシルをけしかけたのもカリウスかもしれない。
「よく黒い羽があるとか、黒い尻尾があるとか言われないか？」
「何のことか分かりかねます。」
しらっと美形の微笑みで返される。悪魔という名詞はなくとも、“黒い羽”はこの世界でもほぼ同様の意味を持つ。本当に分からない

わけではない。
美形の微笑みって怖いってほんとだよな。
彼の手の上で転がらされているのを感じて嘆息した。
それでもカリウスを信頼しているのは昔の記憶とたまに見る害のない微笑みのせいだと思った。

◇　カリウスの独白（前書き）

カリウス視点になってます。

◇　カリウスの独白

朝から紅茶を片手に執務室にこもり、（剣を返却後の）昼休憩は剣の練習にはげみ、午後も山のように詰まれた書類を片付けていく。夕方になり体力づくりの走りこみをし、夜が更けると読書と勉学に励む。
深夜も深まり寝静まった後に寝台に入り、誰よりも早く起き身支度を整える。そして執務に入る。
エディリオという人間は酷くストイックな生活をしていた。
自分のシュミというものはもたず、ひたすら自分に与えられた職務をこなす。空いた時間があれば己の鍛錬と自己研磨に励む。睡眠時間は3～5時間という少ないもので毎日それですごせているのは疑問に思うぐらいだ。

そんな生活ができる人間なんてほとんど居ない。
やれといわれれば、しぶしぶ1，2日やる人はいると思う。だが、一週間以上続けられる人間なんて稀であろう。人は怠惰におぼれる生き物だ。このような生活を是とする人は少ない。
それをリオ殿下は、誰に命令されたわけでもなく、殿下と同じ生活を送る。

ある日との夜中。その日も遅くまで本を読むリオ殿下に気がつき、ブランデー入りの紅茶を入れて差し上げた。
ふと息をつく殿下に「もっと楽に過ごしていいのですよ？」と声をかけた。
なんでそんな風に声をかけたか、自分でも分からなかった。
伊織殿に殿下としての勤めをしっかりはたさせているのは自分のは

ずなのに。
ふと出してしまった私の甘言にリオ殿下はきっぱりと否定の意を示す。

「僕はただの代役だからね。時期が来たら返却しなければいけないだろ。気を抜くわけにはいかないっていうか。」
だって。と彼は続ける。
「鍛錬を忘れれば筋肉が落ちるし。知識も使わなければ衰える。業務は滞れば支障をきたす。何一つおろそかにするわけにはいかないんだよ。」
普段の能天気さ丸出しの姿とは違う。もうひとつの顔だった。

はっきり言おう。私はリオ殿下を侮っていた。別段嫌いなわけではない。ただ殿下の前身とはいえ、取るに足らない存在だと位置づけていたのだ。
だが考えてみればそれは違うとわかる。
明るさを表面に出しながらも、それだけじゃないところがある。
業務は一切手抜きをしていない。時間が長くかかったり、愚痴をこぼす事もあるが、責任を持ってやり遂げている。投げ出す事はない。
私は気づけなかった。もしかすると気づかない振りをしていたのかもしれない。殿下ならば当然のようにもっと早く、当然のようにやってのけるから。

さらに殿下と同じ顔と声で、能天気に笑い、からかわれているのを良とする姿が侮りを少なからず加味していたと思う。
そして、自分のような存在にいいように扱われて是とするのか。

リオ殿下は言う。
「僕は臆病な人間なんだよね。人に嫌われるのが怖いし、人を信じるのが怖い。だから自分から動きたくない。からかってくるのは嫌

いじゃないよ。別に自分はMって訳じゃなくて、僕に対して興味があって相手をしてくれるわけだから、それが嬉しいんだ。君だって口で言うほど悪い人間じゃない。僕のことを気にしてくれているのはわかるから。」

デジャヴ。
かつて同じ顔、同じ声で似たようなことを言った人がいなかったか？人の期待を裏切るのが怖くて刻苦し精進されていた・・・。

「僕は生前長く入院していた。その時に思い知ったよ。仲良くしているように見えても、利益がなければ絆は弱くなる。病気で手のかかる存在に陥った時、友情とは儚いものだと分かったから。」

過去の痛みが瞳の奥に隠し切れないで浮かんだのをみた。
遠くはない記憶であろう事はわかる。伊織の死後すぐ今の記憶につながったわけと言っていたから。異世界(むこう)がどんな常識をもった世界かは分かりかねるところはあるが、こちらもさしてかわらない。必要とあらば近づき、利用価値がなくなれば離れるモノの数が多いのは確かである。

「悪いね。“こんな”で。元のエディリオのように立派な人間じゃなくてさ。」

そんなことはございません。
そう言った自分の台詞は慰めに聞えたようで、リオ殿下は薄く笑んだ。

「立派になれない分、僕が居たときは楽しかったと思えるように頑張るよ。」

そのために笑い答え、動き、努力する。
そんな心情、まったく気がつかなかった。私はエディリオ殿下というフィルターに惑わされて、リオ殿下という人柄をしっかりと見ていなかったのだろう。本質に気がつけなかった。
情けないと思う。
この人もまた、自分が仕え支えていかなければいけない人だったのだ。
貴方に心からの忠誠を。と口に出そうとして、ためらった。
安っぽいその場しのぎの台詞にしか聞えない。信じてもらうに値しない。
それは自分がまいた種とも言えるし、殿下の心因が原因でもある。

だが誓いは口に出す事がすべてではない。
私は心の中で深く誓い、これからの行動で示そうと決めた。

3－1．ソニアー男の事情ー

朝、書類を持って執務室に訪れたカリウスは首をひねって怪訝な顔をした。

うわー。すごい顔されたよ・・・。

おそらくそういう顔をするだろうという、予感はあったんだよね。彼の視線の先には、大量の紅茶の出し殻と、ほのかにぬれて乾ききれていない髪。苦虫をつぶしたかのようにさえない顔をした主君がいる。

いわゆる僕のことだが。

まあ仕方ないと思う。自分でもやらかした自覚はある。

「どうかされたのですか？」

「何でもない。」

当然、質問がやってくる。だけども僕はさえない顔のままごまかした。

もちろん嘘。

だけども自分はこう答えるしかない。

ある意味些細で、心理的に大事。

だから、言うわけにはいかないんだ。

原因となる要因は、今朝目が覚めた時に朝の男の生理現象を目の当

たりにして、ショックを受けたことにはじまる。
某アニメ風に言うならば「もっこり」していたのだ。
眠りが深く目覚めが早い性質なのが原因か、それとも環境変化でストレスをかかえていたのが原因か分からなかった今までの目覚めはとくに普通に過ごしてきた。
だが、体は健康なる男。本来ありうる一般的な目覚めをしただけなのだ。

とはいえ、女にはありえない事。
起きて気がついて、赤くなって、自分を疑って、焦って、頭に血が上って混乱が加速して、朝から水をかぶって紅茶をひたすらのみ精神の安定を図るというよく分からない暴挙なんぞをしてしまったのだ。

だって別に見る機会もなかったし、そんな事会話に登った事もないし。
エディリオの記憶から呼び出すなんてこと、落ち着いて出来る状況じゃなかったし。
そうなる時は、情事の時ぐらいだと思っていたし。

ぶちぶちと頭の中で弁解する。
伊織としての人生は奥手だったわけで、Y談の知識も標準より少なめかもしれない。

というわけで、一風変わった朝の風景の名残でカリウスは怪訝な顔をし、僕は一日も始まったばかりだというのにすでにぐったりしているのだ。

“何でもない”なんて見るからに嘘丸出しで、カリウスは僕を見て柳眉を潜めた。

「なんです？欲求不満ですか？」

彼も本気でそう思ったのではなく、軽く冗談を振ったんだと思う。だけども、正解ではないくせに僕の動揺を誘うのに十分なものだった。

だって、だよ？

欲求不満じゃないか？って疑ったことが、朝の暴挙につながる一番の心理状態だったわけだから。

「・・・違う。」

反論はするものの、顔を背けてしまう。

それがさらに、火に油を注いだ行動だったかもしれない。

まさかの手ごたえに、一瞬驚いた顔をし、すぐに人の悪い笑みを浮かべた。だが、自分には心の余裕が失われていたので、気にとどめる事ができなかった。

カリウスは近づいてきて、僕の机の上に手持った書類を置いた。だがその後離れるわけではなく、机に手を置き少し声を潜めて微笑む。

「そうですか。もしそうならば、私がお相手をして差し上げてもよいと思ったのですが・・・。残念ですね」

「は？」

「リオ殿下は女性の心も持っていらっしゃるから、私でもご協力できるかと。それとも、私の容姿じゃ不服ですか？」

「別に欲求不満じゃないって言ってるだろー。カリウスは見てると心躍るような美形だけど、不服とか言う前に無理だし、いらないか

ら。
もぉー、なんでそんな展開になるんだよ。」
座っている僕の斜め上、手を伸ばすと届く位置にムラサキの瞳が微笑んでいる。
流し目なんてあった日には、何人かの女性が卒倒してもおかしくない破壊力をもって。
本気じゃないと分かっていても、美形のこの台詞は心臓に悪い。うろたえ、脱力してしまう。

そりゃね、美形を鑑賞するのは好きだよ。男も女も美しい人は目の保養だと思うんだ。すっげー。いいもの見たって気持ちになるしさ。芸能人とか見てキャアキャア騒ぐじゃないか。
だけどそれは鑑賞であって、当然実際どうのこうのっていうのはまったく別問題だ。

「く。」
カリウスは手を口にあて顔をそむけた。笑いをこらえてるようだが、堪え切れない声が口をつく。

「な、なんだよ・・・。」
「そうですか。心躍る美形ですか。
そんな風に見られているとは思いませんでした。」
「見なれ慣れているくせに。」

間違いなく、黄色い声が飛び交う人生を過ごしてきただろう。
聞いたわけじゃないけど、見てりゃわかる。

「城内の女性の方々からはよく見つめられていますが、まさかリオ殿下までとは思いませんでしたので。」

悪びれない美形の余裕発言！
流石だよ。

まあ・・・。
僕は、カリウスを見あげた。
気のせいでなければ、彼は最近とても気安くなったと思う。冗談もよく飛ばすし、意味のない会話も増えた。楽観的に捕らえたい僕の勘違いかもしれないが、とても付き合いやすくなった気がするのだ。

「断られてしまったのは残念ですが、見ているだけがよいのなら仕方ありません。
ああ、いつでもご用立てしていただいてかまわないので、気分が変わったらおよびくださいませ。
もちろん冗談ですが。」
「冗談で結構。」

僕はむっすりして答えたのだが、カリウスには屁でもないらしい。押し殺した笑い声が聞こえる。気のせいじゃなければ、「これは癖になりそうです。」と物騒な独り言まで言っていた。
そんな癖いらないから。
っていうか、一応主君だからね。僕。役目果たしきれてないけど。

カリウスは、未だに笑い治まらないのを制し、茶台にある水をコップに注ぎ自分の机に戻りそれで喉を潤した。
そして本日分の書類を確認し、机上に積み上げる。

そこで、「ああ。」と思い出したかのように口を開いた。

「欲求不満じゃなくても、ソニア様のところには行って頂けませんか。お世継を作る努力をなさるのも政務の一環で必要な事です。」

「確かにソニアとはいい関係を築いていると思うけど。そういう仲じゃないし・・・。」

渋面しながら、声小さくつぶやいた。

ソニアとはエディリオが持った側室である。正妃ではないが、ソニアが居るおかげで正妃を持てという世論の動きを何とか、かわしているという状態だったりする。いずれ正妃になってもおかしくない身分と評論。

エディリオがソニアをどう思っていたかは分からない。僕が持っている記憶では、彼の感情は分からないのだ。愛していたのか、それとも政治的な付き合いだったのか。

とはいえ、自分自身は女として生きてきた感情を持ち、記憶も鮮明だし真新しかったりするわけで、妻という関係じゃなく、女友達に近い関係を築いているのだが。

カリウスはそんな関係を望んでいるわけじゃないだろうこと、わかっているけどね。

だけど、気がつかないフリをする。

「そうですね。今日はこのまま執務をはじめましても集中できなそうですし、午前中はソニア様のところにお伺いして気晴らししてこられてはいかがですか？」

「質問。増長させたのは誰だ？」

「さあ？私には分かりかねます。」

上目遣いに睨め付けるのだが、カリウスはまったく気にしない。しれっと言ってのける。

「ソウデスカ。でもまあ、大丈夫だよ。業務を停滞させるわけにもいかないしさ。」

「リオ殿下。少しは私を頼っていただいていいのです。それくらいの時間なら、遅延というほどでもございません。」

だけども病気なわけでもないし、多少動揺は続いているが休むほどではないと思うけど。

その反論もきっと想定内だったのだろう。

僕が口を開く前に、それにと付け加える。

「逆に気もそぞろで、間違った決済をされても困ります。」

そこまで言わなくても・・・。

結局、僕がカリウスに勝てるわけはなかったのである。

３－１．ソニアー男の事情ー（後書き）

１１時ごろＵＰ。１２時ごろ改稿ＵＰしました。筋はかわりませんが、主人公の心情がいくらか追加されています。

3－2．ソニア－甘い香－

自分の部屋ではない目的の部屋にいくと、部屋にただよう花の香りを感じた。女の時には気がつかなかった。こんなにも甘く感じるなんて。
部屋は花を模した柄が多く、淡い色使いが多く清楚で華麗な雰囲気だ。
部屋主であるソニアは、テーブルの脇に立ちポットから紅茶をカップに注ぐ。花をフレーバーしてあるその紅茶はさらに甘い香りを部屋に撒いた。

僕はソニアの部屋に来ていた。
いろいろと理屈つけられて部屋から追い出されたのである。
いわく「働きすぎだから休憩してください」だとか、いわく「たまにはソニア様とお話しするのも仕事です」だとか。
来た当初は馬車馬のように働かせる気満々だった悪魔が、最近はやたらと休憩をとらせようとするのはどんな心境からきているのか分かりからない。

「お久しぶりですわ。リオ殿下。」
「うん。なかなか仕事が片付かなくてね。手際が悪いのもあるんだけどさ。
今日は急に来ちゃってごめん。毎度いろいろと迷惑かけて。」
僕が来ているとき、彼女はメイドを下がらせる。
原因は僕。
僕が気軽に話しが出来るよう、エディリオとして長く繕わなくても

いいよう第三者を下がらせるのだ。
そう。彼女も理解者だ。

すでに理解者である二人と違って、彼女にはカミングアウトする予定はなかった。演技という仮面をかぶりごまかすつもりで彼女と対面した。過去どうやって接したかをひたすら思い出し、殿下らしくと心がけ行動したのだが、残念ながらすぐにばれた。
自分の演技力に悲しくなったのだが、一緒にいたナーシルいわく悪くはなかったとの事。
だがばれた後も、ソニアは深くは追求しなかった。追求されても自分自身で分かってないから答えることも出来ないわけなのだが、彼女は今の自分をすんなりと受け入れ話し相手となってくれたのである。

ソニアはテーブルに花の香漂わす二つのカップを用意し、斜め横の椅子に座る。
斜めから見てもソニアは美しい。
はちみつ色のブロンドの髪は、天使の輪を備え腰まで流れるように存在し、長いまつげは切れ長な目を大きく見せている。王宮の華と美辞麗句を並べ褒め称えられているその姿、その姿勢には一本の凛としたユリを思わせる。
お姫様だよなー。
絵本から抜け出してきたといってもおかしくない様に、何度納得し見入ったものか・・・。
自分が“おうじさま”っていうコトは棚上げで、思わず納得してしまう。
まずね、こんな自分が“おうじさま”をやっているのは、間違いだと分かっているし。

彼女はくすくすと笑う。

「カリウス様にからかわれて逃げてきたのですか？」
「近いような近くないような・・・。というより僕に対する認識ってそんなもの？」
「差異はないでしょう？」
「酷いな。」

不服とばかりに肩をすくめる。
思わず見とれていたのだが。そういえば見た目はまんま“おひめさま”なソニアだけど、性格はそうでもなかった。と思い出す。
王子様を待っているだけの弱いお姫様ではなく、自分で何とかしてしまうタイプだ。
ただ剣を持って動き出すのではなく、弱みを探したり味方を雇ったり、下手すると攫われた場所で自分の居場所を確立してしまったりするだろう。

「それでどんな内容でからかわれたのですか？」
楽しい事をリサーチしたいと、ニコリと微笑む彼女の顔が言っている。
彼女いわく、僕は「楽しい話題の宝庫」らしく「飽きない」存在らしい。
少なくとも、“僕”とソニアは夫と妻という関係じゃないとおもうんだ。

「カリウスの顔は心踊るような美形だって言ったら笑われた。」
「それは分かりますわ。美形は目の保養になりますわね。少々カリウス殿は表情の硬いところがございますけれども。でも、心躍るって表現がリオ殿下らしいですわ。」
期待をさすが裏切らないと、目を輝かせている。

「後、欲求不満扱いされた。」
「あら。そうなのですか？いつでも夜おいでくださってかまわないのですよ？」
「違うから。そうやってからかわれただけだよ。」

本当に訪れて驚かせてみるのも、意趣返しでいいかもしれない。
とふと思った考えだが、すぐ否定した。
なんかそれをやっても、勝てる見込みがなさそうだと。夜通し話し続けて次の日にぶったおれるとか・・・。いやそれはまずい。

「後はそうだなー。僕ってやっぱり男なんだなー。って、思ったかな。」
「それはまた？　何かあったのですか？」
「い、言いづらい。」

朝の恥辱を思い出してしまった。
分かってしまえば、どうって事ないと思うよ。
毎朝来ると思えば、“トイレ”と一緒の生理現象。慣れと覚悟とはすごいもので、最初は抵抗があっても意外となんとでもなってしまうものだ。いやほんとまじで。

「まあ、リオ殿下が男なのは変えられないですわね。」
「女に変化しても困るけどね。元の持ち主が困ってしまうし。」

精神が女だからって性別が変わるなんてご都合主義な事、たとえ異世界でもおきるわけがなかった。もし技術としてあるのならば、地球のニューハーフの方達が狂喜乱舞して喜ぶことであろう。
ある意味、技術という意味では地球の方が進んでいるのか・・・。
見た目だけなら“工事”をすれば女性になることができるのだから。

「そういえば、僕の事情すぐ信じたのが不思議なんだよね。」
「そうですか？　性格は似たところもございますがやはり別人だと思いますわ。異世界からの転生とか前世の記憶の件(くだん)は信じがたいものがありますけれども。」

この世界の転生理論とはいえ、非日常的な出来事である。
他人の立場だったら信じられないのも道理というもの。大体外見がまったく一緒だったならば、多少の性格の差異はイメチェンぐらいで突拍子のない事実にはたどり着かないのだ。
事実3人の理解者以外には無事だまし通している。カリウスとナーシルの働きでさほど他者との接点はなかったりするわけだが。

「でも、わたくしリアリストですから、転生であろうと多重人格であろうと、今のリオ殿下自身を見ていて細かい事は気にしていないですわね。」
「自分の旦那が対象でそういいきれるのがすごいよ。」
「些細な事ですね。新しい関係を築けばいい事ですもの。嫌いな人格になってしまったなら問題ですが、リオ殿下の事は好きですわ。だからリオ殿下はリオ殿下のままでいてくだされば いいと思いますわ。」

人生の伴侶だ。王族のいらぬ特権があり、僕は持とうと思えば他に妃(つま)をもてる。だけどもソニアからみたら生涯ただ一人の存在になる。簡単に割り切れる事ではないと思う。
だが彼女はまったく気にしない。自分の道を行く。
正直ソニアのこういうところはすごいと思う。
あらゆる背景に惑わされず、ありのままの自分を見てくれる。その事実はとても助かるし、嬉しい。

「でもまあ、お世継は問題ですわね。」
「カリウスにもその問題は政務の一環だといわれたよ。」
「仕方ありませんわ。次代を育むというのは大切ですし。それだけではなく、安全面を考えてもお世継が居ると居ないは大きな違いですから。カリウス様が多少口うるさくなるのも頷けますわ。リオ殿下の御歳ならば早くはございませんし。」

言いたいことはわかる。なんといっても自分は王位継承権1位という立場。世継の必要性なんてものは耳タコ状態で分かっている。それに自分の身の安全面を考えても。
皇子が産まれれば、皇子が継承第2位で僕に不満をもっている貴族の方々は、僕を弑するだけではなく皇子も殺さねばならない。二度手間だ。
すでに世継が居ればよかったと思う。子供は嫌いじゃないし、わが子のようにかわいがる事も出来たと思う。
だがしかし、今はいない。
いないのならば作るしかない。しかし、作るといっても・・・。

「気が重い。」
「事実は変わらないと思いましてよ?」
「でもそういうのは興味ないし。元に戻ってからでいいと思う。」

ふむ。と考えるようなしぐさをするソニア。
本能的に危険を察知した気がした。
ちょっといやな気がするんですけど。

「逃げていても仕方ありませんわ。」
そういいながら、僕の首の後ろに手を回してくる。
しなだれるような感じで、たって前かがみに顔をよせる。
鼻腔に甘い香りがくすぐる。

「な、ちょっと？」
「何事も経験と思って試してみるのも一興ではございませんこと？」
ソニアの両腕が僕の首の後ろで組まれ、ソニアの右膝が僕の組まれた足の左横に乗り重心をささえる。
顔はすでにかなり近く、己の頬の横で交差し、体と体の隙間は５ｃｍとない状態まで密着する。
自分の手は何処に置いていいのか所在なさげにただよう。
腰に手を回すのは論外だったが、押しのけるのも気が引けたのだ。
密着状態での時間は止まったかのように長く感じる。
「リオ殿下・・・。」
耳元でソニアの声がささやかれる。
甘い香りがさらに強くなった気がして、ドキドキと脈が速くなる。
ドキドキ？
なんでそんなものしなければいけないんだ。
女子高出身じゃないけど、女同士でハグなんて日常茶飯事だったはず。
そう自分にいいきかすけれども、なかなか功をなさない。
甘い香りと、ソニアのとても美しい顔と肢体に五感が刺激されまくってしまう。美酒を飲んだように酔ってしまう。
無理無理無理――――！！
心の中で悲鳴をあげる。
だけども不思議と声がでず、唾を飲み込むにとどまる。

その後、暖かく柔らかい吐息が頬を打つ感触を感じる。

「目をとじてくださいまし。」

甘い甘い誘惑。感覚が麻痺し、頭までその意味を運ぶのに時間がかかる。

目を？

なんで。

答えはわかってる。

でも、僕は目をとじれなかった。

除々に近づく他人の顔に、さらに速く鼓動を打つ。

口にキスが落とされる。

柔らかく暖かい、他人の唇。ふんわりと優しくタッチする。

一瞬離し、

もう一度角度を変え、

再び口づける。

今度は強く、しっかりと。

ちょ、ちょっと！！！ストップ！！！

僕は、ソニアの体を押し返した。

思った以上に力がはいってしまい、ソニアはふらつく。

「ご、ごめ。」

驚き顔のソニア。

罪悪感ですぐ謝罪する。

彼女の体制が落ち着いたのを見て、肩から手を離した。
軽く息を吐く。
いろいろとやばかった。と思う。
自分の手はどこにあった？
右手は肩に、左手は彼女の腰のあたりに行っていなかったか？
口元を手で覆い、赤くなった顔をソニアに隠しながら僕は続ける。
「でも、無理だから・・・。」
いやじゃなかった。
流されそうになった。
「今はまだ試したくない。」
流されたくない。
「リオ殿下・・・。」
「だからごめん。」
「申し訳ありませんでした。殿下。少々調子にのりすぎました。」
たたずまいを直し、彼女は言う。
「ですが、再度言わせて頂きますが、いつまでも逃げているわけには行かないと申し上げます。」
確かにエディリオがいつ帰ってくるか分からない。５年後？１０年後？そうなっても世継がいないというわけにはいかない。

いつまでも逃げているわけにもいかない。
いくら自分が否定しようと、今この身にあるのは王位継承権をもった存在という事実。
プラトニックを語るわけにはいかない。

僕がずっとこのままで居るかもしれない。
その可能性はあえて目をそらし、見ないようにしていた。

◇　泣き言

いつもの日課である剣の練習をし、僕は木漏れ日のある芝生にねころがった。剣をすぐ手の届く位置におき、頭の後ろで手を組み、空を見あげた。
天気がいい。

「空が青いなぁ・・・。」

澄み渡るような深い青が目に痛い。
電線など無粋にさえぎるものもなく、大気をよどむ排気ガスもない。
それだけで、こんなにも蒼さが違う。
私(イオリ)が住んでいた場所と、遠くはなれた世界ということがまざまざと見せつけられる。

1ヶ月も経つとエディリオがどんな人間だったか、回りからどんな評価を受けていたかが実感として分かってくる。
比較的周りとの接点は少なくしているのだが、避け切れない付き合いというものはある。元来彼は口数の少ない人間であった事が功をなし、控えめな発言しかしていなくとも怪しまれず、そしてボロが出ることもなく演じている。
そういう他のかかわりの中で感じた、エディリオに対する評価は、国としては有難く、代役としては気が重くなるものだ。
文武両道、清廉潔白、高潔な生き方そのものと評価され、民衆の評価高く時期王として期待されている。

そんな殿下の代理業務はなんとかやれている。と、思う。
ただ、それがどれくらい完璧にやれているかとなると、自己評価は難しい。

「逃げているわけには行かない・・・か。」

つぶやきとともに、つい先日のソニアとの会話を思い出していた。
少々余計な事まで思い出して、顔をほんのりとあたためるがかぶりをふって気にしないようにつとめる。
あの後は差し障りのない会話を少し続け早々に部屋を退出したのだが、衝撃的なことの連続でその日一日分の記憶を消去したいと頭をかかえて布団に入ったりもした。

いつまで自分はいるのか？いつまで演じ偽らねばいけないのか？
そんな事わからない。
過去に自分と同じ現象を持った人がいないかと資料を読んでみたが、空振りで何も新しい情報はない。依然と受身な体制で待っている事しかできなかった。

本当の魂は帰ってくる兆しを見せない。

「何やっているんだ？」

木漏れ日をさえぎる影が自分をおおい、頭上から声がする。

「休憩中さ。」
「なるほどな。」

僕は背をあげ、声の主であるナーシルは隣に腰を下ろす。
赤茶けた髪と日に焼けた肌はそのままに、黒色をメインにした軍服を着ている。刺し色として蒼色の刺繍と飾りを彩っている。

ラフな格好をよくする彼には、この正装姿は少々めずらしかった。

「空を見ていたのか？」
「うん。よくわかったね。」
「まぁな。」

懐かしそうに空を見上げるナーシルの姿。
その姿が古い記憶と重なる。
自分じゃない記憶。
そういえば、よくこんな事もあったかもしれない。

「懐かしい？」
「・・・・・・。そうだな。」

つながらない問いかけ。だがしかし、ナーシルは分かってくれたようで、空の向こうに過去を見ながら、小さく答えた。

「そっか。」

沈黙が流れる。風が髪をなぶり、頬をなぶり、体をなぶり、二人の間をかけていく。
しばしの静かな時の流れを、遠い空を見つめ思いをはぜる。

ナーシル、そしてカリウスから昔の殿下の話題に触れる事はない。
思い出話や、僕と比較をすることさえもない。
姿が同じで、中身は別の存在をみていて、比較した感情を持たないわけがないのに、口にしない。
早く元の殿下に戻ってください。
そう思っていてもおかしくないのに、口にしない。そして、僕を受け入れる。

なんで？

なんで何も言わないの？黙っているの？

――え？あの子の病名って・・・なの？それじゃもう・・・・ね。

聞こえてくる、看護婦の噂話（しんじつ）・・・。

――この薬飲めばよくなるからね。病気は治るものだからね。

嘘で塗り固められた、医者の建前。

――すぐ治るわよ。治ったら美味しいもの食べにいこうね。

自分を偽りたいがために発せられる、母の台詞。真実は隠したまま・・・。

みんな、わたしの前では真実は口にしないで、嘘を並べる・・・。

言ってくれれば楽になるのに。

だけどそうならない。だから私は知らないフリ・気づかないフリを演じる。

「リオ殿下？」

ナーシルの呼びかけにはっとする。

少し感傷にひたりすぎたかもしれない。

あわてて、なんでもないって表情を作り出す。

「ごめん。ちょっと疲れがたまっていてボーっとしちゃっただけ。」

急遽取り繕った台詞に、妙に納得したらしく、ナーシルは大きく溜息をつく。

「当たり前だ。働きすぎ、勉強しすぎなんだよ。ちったー、手を抜け。」
「いやいや、ちゃんと手を抜いているよ。ていうか、抜きたくないのに抜かされているっていうか・・・。カリウスが難癖つけては部屋から追い出すから、意外と休憩できているんだ。」
「ああ、まあ。あいつらしいっていうか・・・。それはあれだ。カリウスなりの心配りってやつだよ。素直じゃないけどな。」
「わかっているけど。」

一瞬、逡巡し言っていいか悩む。だけど、小さく声にだした。

「最初はやらせてくれていたのに今はだめだーっていうし、それに殿下はやっていたから僕の仕事でしょ？
何考えているのか分かりづらいよ。
仕事をまかせるだけの技量がないから、任せられないって思われているんじゃないか勘ぐっちゃう・・・」
「そんなんじゃねーよ。リオ殿下がよくやっているって、俺もあいつも認めている。
なんつかー・・・。殿下の場合はとめることができなかった。だけど、おまえは止められる。だから止めるんだと思う。」

殿下のくだりを、言いにくそうに頭をかく。

「あ、いや。ごめん。ちょっと泣き言っぽかったかな。ハハハ。忘れてくれない？僕っぽくなかった。」
「わるかったな。」
「え？」
「姿かさねたり比べちまったり、気を使わせたりしてな。」
「別に気にしていないから。」

殿下のこと聞くのは、いやじゃないと思う。
だから、かまわない。

「なあ、聞いていいか？なんで、そんなにも前と同じだけの量をこなそうとするんだ？」
「・・・・・・おかしいかな？」

僕がひたすら頑張る理由なんて単純だ。
自己の存在意義に震えている結果にすぎない。
きちんとやっていれば、回りに多少は認められるのではないか？自分の価値が付加されるのではないか。そんな打算から動いている。
何かを感じ取ったのか、溜息まじりにナーシルがつぶやいた。

「似ているよ。殿下もリオ殿下も。錯覚してしまうぐらいには。」
どう見たら世間様で評判のエディリオ殿下と僕が似ているに結びつくのか分からない。
僕は、すごい人間じゃない。

ぽんぽん
と頭をかるく撫でられる。

「おまえはよくやっている。年長者の言うことを信じろよ？ああそうだな、俺のが年上だし、兄として尊敬してくれてもいいぞ？」
「なんでそうなるのさ。」
「うーん。兄かいいね。俺そういえば弟がほしかったんだよな。」

そうだ。それがいい。とばかりにニカニカと笑いながら僕の頭を抱えだしぐしゃぐしゃにしだす。
僕の意見なんぞ、まるで聞いていない。

「というコトで、弟よ。困った事があったらいつでも兄に頼ってこいよ。」

爽やかな笑顔に、少しだけ頼ってもいいかもしれないと思った。

4．カリウス－賭けの代償－

「では、賭けの罰ゲームは“カリウスをだます”にしましょう。」

ある昼下がりの休憩時間。
その悪魔の発表は突如出された・・・。
ソニアは楽しそうに微笑んでいる・・・。堕天の微笑みというべきか・・・。

「ちょ、無理！」

僕は思わず椅子から立ち上がって反論していた。

この日ナーシルは非番で暇をもてあまし、僕は書類作業に区切がついてカリウスに遊んで来いとおいだされ、ソニアは異国の『カード』というゲームが手に入ったと喜んでいた。
それらの偶然が重なり、自室でのんびりと読書を楽しんでいる僕の元へ来訪者が2人同時に訪れ、さらにソニアが持ってきたゲームをやろうと二人が結託した地点で流れは決まった。
読書がしたいな・・・。という控えめな意見はもちろん黙殺、というより華麗なスルーをきめこまれ、ただ単純にゲームをするだけじゃ面白くないですわ。といういらぬ提案が登った時も、どうする手立てもなかったのである。
人の話を聞かないのに定評があるナーシルと、人を話のネタだと思っているソニアは聞いていてもわざと聞こえない振りをする。この二人に囲まれた地点であがいた地点で無駄だったのだろう。

だがしかし。
罰ゲームが酷くありませんか？
人様に迷惑をかけるというのも心苦しいという建前、真実はカリウスの仕返しが怖い。
冗談でした。ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡといってすむ相手じゃない。

「なるほど。緊張感あっていいな。」
ナーシルは賛成とばかりに、ニヤリと不適な笑みを浮かべる。
ゲームに緊張感もスリルも必要ないと思いますよ？

「負けなければ問題ないのですわ。まあ、わたくしは負けてもかまいませんが。」
ソニア、つおい子・・・。
美女に生まれてきたのはある意味間違いじゃないだろうか。男に生まれてきたら間違いなく出世コースなみの度胸と気概がある。
彼女ならばカリウスを騙すことぐらい、些細な事だろう。

「ま、まままま、ってよ。僕が負けたらどうするのさ。僕は演技力なんてないから嫌だよ。ソニアにだってすぐばれたしさ。」
「あんときゃ悪くなかったぜ。」

騙そうとしたって、しょっぱなからばれて終了が目に見えている。
やるだけ無駄だ。
そうは訴えても、ナーシルもソニアも大丈夫だと取り合わない。
いわく、リオ殿下は演技力がある。とのこと。
だったらなんでソニアにすぐばれたのさ。

「ナーシル。兄だと思ってもいいって言っていたよな！こういうときこそ僕について助けてくれてもいいじゃないか。」

「あー、まあ確かにそうかもしれないが・・・。まだ負けたわけじゃないしそこまで真剣に負けたときのこと考えなくても。」
負けたときのことを考えるのも、情けないと思うのだが、確率でいえば三分の一。非常にもろい橋渡り。
「本当に心からどうしてもいやなのか？」
じーっと目をみつめられ、フイッとボクは顔を背けてしまった。
そういわれると弱い。過剰な罰ゲームだとは思うけど確かに、みんな始めてやるゲームだ。勝敗の確率は公平にみな一緒だ。
誰が負けてもおかしくない状況で、一人だけ頑固に否定するのも気が引ける。
加えてとんでもない無茶ぶりかといわれると、そうでもない。人ひとり、冗談の範疇で騙すだけの話。
「そういって、本当はその罰ゲーム楽しそうだとおもっているんだろ。」
「まあな。」
口の端をついっとあげた。
「成功しても、失敗しても楽しそうだからな。」
負けない！絶対負けない。負けなければいいんだ！！！
「わたくしは、リオ殿下が負けてくださるのが一番楽しそうだとは思っていますけど。」
酷いよ。ソニア・・・。
「まあ、諦めろよ。
負けなければいいんだからさ。」

そんな言葉にほだされて、始まったカード勝負。
見た目はトランプにそっくりで、ルールはポーカーと麻雀を足して2で割ったようなもの。
手持ち２０００点ずつ配布で、上がり札によって点数が違う。ツモあがりだけで、点数も減るだけ。
そして持ち点が全部なくなった人の負けである。

考えようによっては、現代でトランプをやっていた自分が有利なはず！
まけれねええ！

と、意気込みは僕が一番すごかった。
まあ、それだけだったんだけど。

そして数刻後・・・。

「なんで・・・」
テーブルに散らばったカードの束を眺め僕は愕然とした。
顔からは血の気が引くおもいだ。

ソニアの上がりで僕の持ち点は０になった。
意気込みに裏切られ、罰ゲームの対象になってしまったのだ。

「あら。勝負とは残酷なものですわね。」
「なんていうか、ある意味期待をうらぎらないな。さすがリオ殿下だ。」
僕とは対照的に非常に楽しそうな二人。

酷い。酷すぎる。
僕は睨めつけた。
だが二人はどこ吹く風。まったく気にしないどころか笑いを強める始末。

「勝負は勝負。期待していますわ。」
そして、カリウスをだますための計画会がはじまった。

こんな些細なきっかけ。
ソニアもナーシルも楽しければいいという以上は何も考えていなかった。
二人はカリウスが秘密を抱えていたことをしっていて、僕は知らなかった。
二人はカリウスが殿下に負い目があることをしっていて、僕は知らなかった。
本来止めるべきは二人だった。だが面白さに目がくらみ、カリウスをだます方法を、「殿下に戻ったフリをする」というモノにしたのは二人のミスだったと思う。

翌日、夕暮れ時。
僕は執務室にいた。
机には座らず、窓際で書類を眺める。

夕暮れの細い光で文字を追う。
明かりはつけなかった。

少し経つと部屋のドアがノックされ、あけられる。カリウスだ。
この日の彼は他の事をやっており、僕とは一度も会っていない。
両手に書類をかかえ、いつもどおりにドアをあけたのだが、その後は違う。
薄暗さと、窓際にたたずむひとつの影に一瞬驚きの様相をするが、その影が誰かわかると、ふと息をつく。

「明かりをつけずに何をやっているのですか？」

半分あきれを含んだ声に僕は何も返事を返さなかった。
聞こえないフリではない。
一瞬カリウスの方に意識をむけはするが、それだけだ。

「リオ殿下？」

そう呼ばれたのに不愉快さを感じ、まゆをひそめる。
「不愉快だな。」

一刀両断。
「字（あざな）なんてもの、俺には不釣合いだ。」
「殿下？」

ふん、とばかりに横目でみたが、すぐに視線は書類へと戻す。

「先日言っていた教育機関の予算の件はどうした？書類がないようだが・・・。」

「昨日決済を・・・。」
「そうだったか？ああ、そうだった気がするな。」
その後にも2，3件同じやりとりをする。すでにやった決済の質問。
成り立たない会話。

頭を振る。頭にかかった霞をふりはらうかのように。

「なんか調子悪いな。すまんが、今日はここまでとさせてもらう。
後は頼む。」
「殿下、大丈夫ですか？」
「問題ない。そういえば・・・。」

あごに手をよせ考え込む。
そう。そういえば、こちらに来る前、というか、エディリオとして
覚醒する前に・・・
体のきしむような痛みを感じた。
伊織の最後とエディリオの覚醒の合間に。あれはこちらのことだっ
たのか？日本のことではなく。
白い服は白衣かとおもったのだが、カリウスも白を基準とした服を
よく選ぶ。

「調子が悪くなる前にカリウスの姿を見たような・・・。」
そう口にすれば、それは正しいことのようかに思えた。
話しかけられた台詞は日本語に聞こえなかった。こちらの言葉じゃ
なかったか・・・。

「分かっていると思うが、俺は裏切られるのが嫌いだ。本当に関係
ないな？」
カリウスを問いただすかのように、強くみた。
普段ならやらないような視線で射抜く。

自分は殿下だと、言い聞かせ演技をしている最中なのが幸いしてか、重圧を与える事に成功した。

「覚えていらっしゃらないのですか？殿下は自分からお望みになった・・・」

カタリ。

動揺

演技が崩れる瞬間。殿下がみずから望んだ？何を・・・？自身の意識がなくなることを？

はっと、カリウスの顔つきがかわった。

「まさか・・・。」

と。

「リオ殿下ですね？」

確信をもって。

「その呼び名は不愉快だと。」

ごまかそうとしたが、ダメだった。声に動揺が混じっている。

「リオ殿下が不愉快とおっしゃるならば、伊織様。これでよろしいでしょう。」

「う・・・。ごめんなさい。」

「やはりそうでしたか。すっかりだまされました。

こんなにも演技が上手だとおもいませんでした。」

大きな吐息とともに繰り出される脱力感。

「ソニアにはすぐばれたけど・・・。」

声が小さくなりながら訴える

「ソニア様はきっと予感があったからわかったのです。特別です。一緒にしないでいただきたい。」

「予感？」

「そんなことはいいのです。一体今回はどんなつもりですかね？ええ。じっくりときかせていただこうじゃありませんか。」

「いやその・・・。賭け事を。」

事情を話すとどんどん目つきが厳しくなっていく。
あだ名を呼ばれるのがいやだとか、書類のやりとりとかは、ソニアの案だというと、

「そうですか・・・。一度ソニア様とは白黒はっきりとしてみるのもいいかもしれませんね・・・」

え？狐と狸の大戦争でも始めるつもりですか？
初めてもいいんですが、お願いだから僕をまきこまないでね。

そう願ったのだが残念ながら完全に無関係ではいられなかった。
ソニアとナーシルと僕と。3人一緒くたに、カリウスに怒られた。
正座という週間はなかったのだが、心は廊下で正座している状態。
二度と賭をしないと約束と同時に、

僕はすっかりとタイミングをはずしていた。
だが、タイミングだけの問題じゃないのかもしれない。

「僕が出てきたわけをカリウスは知ってるの？」

「もしかして、ソニアは僕になることを知っていた?予感していた?」

何も知らないのは僕だけかもしれない。すんなり受け入れられた不自然ともいえる事実。

聞けばはっきりする。そうやって問いかければいい。

しかし、その言葉が出ない。

僕は臆病だ。

4．カリウス－賭けの代償－（後書き）

とりあえず完結させようと、下書きのまま投稿・・・orz
そのうち推敲します

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2078l/

転生後の代役王子

2011年11月16日12時58分発行